

拜啓 なかにし礼様——プロローグにかえて 8

序章

第一章 異邦人の覚醒

異邦人の肖像をもとめて 18

〈人生の核〉としての少年時代 24

記憶のなかの原風景 28

空襲 29

逃避行 31

異郷への追放 34

「引揚げ文学」の観点から 37

第二章 創作への助走

海のうへの『リンゴの唄』 46

運命の契機について 50

小・中学校時代の影と光と 56

1 〈影〉について 56

2 〈光〉について 64

### 第三章 詩人の誕生

都市文化の洗礼 70

孤独の肖像 74

創作者への道 80

シャンソン歌詞と翻訳詩 84

「三拍子」をめぐる問題 91

作詞家への途 95

1 石原裕次郎 96

2 丸山明宏（美輪明宏） 100

### 第四章 歌謡曲と国家の影

衝撃的な告白 106

ダブル・モチーフという戦略 113

解釈をかえることのリスクと意味 121

みえかくれする国家の影 127

## 第五章 思想としての〈昭和歌謡〉

### I

流行歌の思想 134

演歌が社会批判だった時代——添田唾蟬坊と「演歌」 135

歌の歴史を編むということ 137

「演歌」と新体詩 140

### II

戦後社会と〈昭和歌謡〉 144

歌をヒットさせるということ 151

〈ひらめき〉が降りてくる 155

〈歌謡曲〉が軍歌になった時代 158

〈昭和歌謡〉をもたらした「革命」 163

〈昭和歌謡〉が「思想」になるとき 167

## 第六章 方法的飛翔——『夜の歌』の世界

命がけの飛翔 178

無類の幻想文学 180

ゴーストの原型を追って 182

過去の諸作品との関係 187

ナターシャがくれた慰撫 189

父・政太郎による自己批判 192

母・「雪絵」の物語 197

兄、あるいは疫病神としての戦後社会 204

## 第七章 なぜ闘うのか、なぜ闘えるのか

この力の源泉はどこから？ 212

ほんとうの転機は二〇一五年に訪れた？ 212

文学の力が湧きあがる 215

背中を押したのは誰か？ 219

闘えるのは〈文学〉の力があるから 224

第八章 なかにし礼の〈詩と真実〉

「作詞作法」から「作詩技法」へ 228

なかにし礼の〈詩と真実〉 230

1 底辺のない三角形 231

2 歌の五体 232

3 「石狩挽歌」の衝撃 234

見すえるのは、世界と希望 241

エピソード 245

なかにし礼・主要著作物一覧 250

# 異邦人の歌

——なかにし礼の  
〈詩と眞実〉

拝啓 なかにし礼様——プロローグにかえて

いま、どちらで、いかがお過ごしでしょうか？

昨年の十二月になかにし様の訃報が届けられたとき、どこか違う世界の架空のできごとのように受け止めている自分がありました。私のなかでは、なかにし様がみせてくださった、めくるめくような世界のほうがリアルであり、そのほかの報道はどれも耳もとをかすめてゆく冷たい風のひとひらのように感じていたからです。お亡くなりになったと聞かされても、にわかには受け入れられず、なかにし様の体温のようなものが私のなかでいまでも息づいている感じが、とぎれることなく続いていきます。

私がなかにし様のことを本に書きたいと思ったのは、いまから七年ほどさかのぼる二〇一四年のことでした。そのとき、なかにし様は、日本政府が集団的自衛権の行使を容認したことに激しい怒りを表明されました。そのことが私をこうして立ちあがらせる引き金になりました。

一九五五年生まれの私は、子供の頃からたくさん歌謡曲をきいて育ちました。あの頃

の記憶のどのひと幕をとつても、かならずそこにはその当時きいた歌謡曲のおもいでがセットになつて根づいていような、そんな世代であります。

なかにし様のお名前は、その頃から子供心にずつと輝いておりました。夢のような歌をつくれる、自分とはまるでちがう別の世界のかたのように感じておりました。

その貴方が、地つづきのおなじたち位置から、この恥おおき世界にたいして渾身の怒りをぶつけられた姿は、どんなにか私の心を奮いたさせたかわかりません。そして私は、なかにし様のその怒りが、これまでつくつてこられた歌のかずかずと地つづきのものであったことに、ほんとうに生まれてはじめてわが目を開かれたのです。

さて、私がこの『異邦人の歌』執筆にさいして心がけたのは、なかにし様の作詩家としての長いキャリアと、その前史をなす少年期から青年期までの激動のかずかず、またご自身のがんととの闘い、さらには政権批判の政治的言動など、どれも深い思想と洞察にもとづいたいくつものドキュメント・シーンを、できるだけ順序だてて記録することでした。

その背景には、私なりの「なかにし礼」像をそうやって描きだすことにより、昭和から平成にあいわたるなかにし様のかずかずのお仕事の意味を、歴史時間の流れのなかへ明確にポジショニングしたいとのつよい思いがありました。

しかし、そうはいつでも著述家はその作品のできぐあいによってのみ評価されるわけで、結果がすべてであることは重々承知いたしております。なかにし様がすでにこの世を去られたいま、

本書をおみせできなくなってしまうことがほんとうに心残りでなりません。拙著に対するご評  
価がテストでいったら、零点でないことだけをひとり祈るばかりです。

乱筆乱文、ひらにご容赦ください。

敬具

二〇二二年三月十一日

添田 馨

\*本書では、それぞれの場面や機会に応じて、適宜、「詞」と「詩」のふたつの漢字表記を使い分けております。

## 海のうえの『リンゴの唄』

『リンゴの唄』（作詞サトウハチロー・作曲万城目正、一九四六年）は、なかにし氏にとって「残酷な歌」だったという。

私はこの言葉を讀んだとき、一瞬、戸惑った。なぜなら、私はずっと今日まで、この『リンゴの唄』こそが、敗戦後、もっともはやく人々に愛され親しまれた楽曲であり、わが国の戦後歌曲の出發をつげる記念碑的作品であると信じ込んでいたからである。

よくテレビなどで、なつかしい日本の歌謡曲を流す番組が、むかしはたくさんあった。そのなかで、かならずと言ってよいくらいに流れたのがこの歌だった。

また、ドキュメンタリー番組などで、終戦直後の街の風景の映像が放映されるさいなどに、バックに流れるのも、ほぼ決まってこの歌だった。

私はむろん、リアルタイムでこの『リンゴの唄』を聴き知っていたわけではないが、そうやって、いわば門前の小僧の耳学問のようにしてこの歌を覚えていたのだった。まるで当時のすべての日本人が、この歌の明るい歌詞とメロディに生きる希望を見出していた、そんな風に頭から信じこんでいたのである。

だが、それは私の頭のなかで作られられた神話に過ぎなかったようだ。

仮に、多くの日本人にとってはそうであったとしても、この曲を手放しで受け入れることので

きなかつた人々もまたたくさんいたであろう事实に、私の想像力はまったく及んでいなかったのである。

なかにし氏がこの歌をはじめ聴いたのは、引揚げ船のなかでだった。それはある真つ暗な夜に、お姉さんとふたり甲板から身を投げて自殺しようとしていたところを救ってくれた若い船員の部屋で、だったという。

それは、次のような緊迫した場面として描かれている。

姉と私はフェンスに手をかけ、右足をかけ、心を合わせて、同時に飛び越えようとした。

その時、二人の背中をガシツとつかまえた力強い手があった。

「君たちは何をしようとしているのだ。死ぬなんてことを考えてはいけないよ。元気を出さなきゃダメじゃないか」

日本人の船員さんだった。彼は私たちの肩に手をかけ、ちょっとほくの部屋へ遊びにおいて、と言って歩き出した。

彼は紅茶を入れてくれた。笑うと白い歯がキラリと光る青年だった。名前は福島誠といった。部屋にはラジオがあった。彼はそのスイッチを入れた。海の上で、日本の短波が入るのだ。うだ。

ラジオから、女の人のうたう明るい歌が流れて来た。

「この歌はね、『リンゴの唄』っていうんだ。今、日本では敗戦の悲しみを忘れて、みんな頑張っているんだよ。『リンゴの唄』を唄いながら、焼跡から立ち上がっているんだよ。君たちも、死のうなんて考えないで、頑張らなくちゃ」

（『リンゴの唄』『翔べ！ わが想いよ』）

なんだかとても象徴的な情景ではないだろうか。

二人にとつての命の恩人であるこの福島青年は、その言動の一端から、おそらくは内地の人間なのであろう。敗戦の傷跡にひきずられるというより、戦後復興にむかう新しい時代の風をいわば全身で呼吸して、そのオーラでふたりを包みこむようにして現れる。

これに対して、この瞬間まで、中西姉弟は子供ながらに生きる希望をすべてなくし、今まさに海へ身投げしようとする寸前にまで追いつめられた、時代から見捨てられた存在だった。そんな絶望のさなかに思いがけず現れた希望の光が、この福島青年だったのである。

だが、なかにし氏にとつてそれはなんとも苦しい希望であった。

ラジオからきこえてきた『リンゴの唄』は、女の人の声だったというから、歌っていたのは歌手の並木路子だったのだらう。なかにし氏は、はじめてその歌を聴いたときの印象をこのように書いている。

なんとという明るい歌だろう。私の母国の日本人たちは、もうこんなに明るい歌を唄っている

のだろうか。私たちが、まだ、こうして真つ黒な海の上にいるのに、着のみ着のまま、食うや食わず、命からがら逃げつづけて同胞がまだ母国の土を踏んでいないのに。なぜ平気でこんなに明るい歌が唄えるんだらう。どうして、もう少し、私たちの帰りを待っていてくれないのだ。『リンゴの唄』は私にとって、残酷な歌だった。

おいてきぼりをくったような、仲間はずれにされたような、存在を無視されたような、悲しい想いがこみ上げて来て、私は『リンゴの唄』を唄いながら、泣いた。（同前）

決定的に食い違っていたのは、まさしくそこに流れている時間の速度だったのではないだろうか。

母国・日本といっても、中西少年にとってそこは、まだ見ぬ異国の地といってよかった。やはり自分の本当の故郷は、満州の牡丹江だったのである。

だが、その帰るべき故郷はすでになく、自分たちはいま、寄る辺のない引揚船にのせられ、みぎもひだりも分からない真つ暗な海の上を進んでいる。

中西少年のうちがわをこのとき流れていた時間は、まだあまりにもつらい過去をひきずったままのものだっただろう。それに対し、ラジオからきこえてきた『リンゴの唄』が告げていた故国を流れる時間は、すでにそんな暗い過去とは決別し、どこか知らないずっと先の明るい時代を告知するもののように思われたのだろう。

中国の遼寧省瀋陽市の近郊にあった葫蘆島（コロ島）——当時、ここは在留日本人送還のための拠点となっていた——から佐世保まで、引揚船での二週間の航路が意味していたのは、たんなる海上での移動時間ではなく、戦中から戦後にいたる歴史の激変にさいし、いやおうなく中西姉弟のみこんでいった時空の裂け目そのものだったように思う。

なかにし礼の創作への助走は、すでもうこの時に始まっていたのではないだろうか。あるとき、そう私は確信するに至った。

### 運命の契機について

詩や小説などおよそ文学をこころざす者には、本人にも明確には意識されないものの、少年期のはやい時期のどこかで、なにか思いもよらない運命の契機がかならず訪れているものだ。だが、それが何なのか、どのようなものかをひとことで言いあらわすのは極めてむずかしい。なぜなら、それこそが文学者にとってはじぶんが生きる原点そのものを、無意識のうちに規定しているものだからだ。

わが国でも広く読まれた小説で、作家トーマス・マンの自己告白的な作品として多くの日本人作家にも影響を与えた『トニオ・クレレーゲル』のなかに、じつに印象深い一節がある。

(…) 人間的なものを演じたり、弄んだり、効果的に趣味ぶかく表現することができたり、ま

た露ほどでも表現しようという気になるにはですね、われわれ自身が何か超人間的な、非人間的なものになっていなければならぬし、人間的なものにたいして奇妙に疎遠な、超党派的關係に立っていないければならぬんです。様式や形式や表現への才というものがすでに人間的なものにたいするこういう冷やかで小むずかしい関係、いやある人間的な貧困と荒廃を前提としています。どのみち健全で強い感情は没趣味なものですからね。

（高橋義孝訳）

文学作品が人間の根源的領域の表現であることは間違いないところだろう。しかし、そうした人間的なものゝを表現するはずの作家自身が、「非人間的なもの」であり「人間的な貧困と荒廃を前提」にしているのだとマンは言うのである。

これは、いったいどういうことだろうか？

ひとつの解釈としてありうるのは、文学表現の技法にかんするものだ。つまり、人がなんらかの感情にどっぷり浸かっているときほど、その意識は文学表現から最も遠い場所に追いやられていくという基本的な洞察である。

たとえば悲しみの感情を表現するとき、ただ「悲しい」とだけ書いてもそれは芸術表現にはならない。作家は自分が表現したい感情の流れからいったん身を引きはがし、一定の距離をおいてその感情の微細な襞をくまなく観察し、そして、その言語的対応物をさまざまに文学的表現として配置するのである。人間的なものに対する「冷やかで小むずかしい関係」とはこのような

ことであり、それについてはこれ以上こみいった説明は要しないだろう。

だが、本当に問題なのは、作家のこうしたあり方が人間としての「貧困と荒廢」のうえに立っているのだという、さらにその先にある認識なのである。

人間存在の本質を穿つほんものの文学表現をうちたてるにあたり、作者は非人間的な存在になつていなければならないというこの指摘は、人が文学創作に真摯に向きあうに際し、私にはきわめて重大なことと映る。なぜなら、作家にとつて自分自身の宿命の色濃い影が、そのことによつて、ここには否応なく意識されはじめるからである。

この問題を考えるには、近代以降の文学のあり方について、大きくふたつの共通認識が必要になつてくる。

ひとつはそこで目指された文学が、徹頭徹尾、孤立した個人の内面から発した、個人による、個人のための文学であること。そして、もうひとつは、それらの個人を根底でささえる最後の受け皿となるような絶対的存在はすでになく、あるとすればそれはまったくき虚無なのだということ。このふたつである。

近代以降に個人が文学表現の担い手になつた背景には、私たちが人間らしく暮らしていくために本来必要とされるべき共同体が、取り返しようにもなく失われてしまつた近代社会に特有の都市化された現実があつた。社会的生産の産業化が進展したことにより、大都市と伝統的農村との乖離は決定的となり、個人にとつて大都市は不安ばかりがうずまく新たな異郷と化したのである。

## なかにし礼・主要著作物一覧

※本書執筆にあたり参考にした主要文献

- 『なかにし礼の作詞作法——遊びをせんとや生まれけむ』（毎日新聞社、一九八〇年）
- 『音楽への恋文』（共同通信社、一九八七年）——『音楽の話をしよう』（改題、新潮文庫）
- 『翔べ！ わが想いよ』（東京新聞出版局、一九八九年、のち文春文庫、新潮文庫）
- 『兄弟』（文藝春秋、一九九八年、のち文春文庫、新潮文庫）
- 『赤い月』（新潮社、二〇〇一年、のち新潮文庫、文春文庫、岩波現代文庫）
- 『道化師の楽屋』（河出書房新社、二〇〇二年、のち新潮文庫）
- 『人生の黄金律 自由の章——なかにし礼と華やぐ人々』（二〇〇三年、清流出版）
- 『昭和忘れな歌——自撰詞華集』（新潮文庫、二〇〇四年）
- 『黄昏に歌え——my songs my stories』（朝日新聞社、二〇〇五年、のち幻冬舎文庫）
- 『戦場のニーナ』（講談社、二〇〇七年、のち講談社文庫）
- 『三拍子の魔力』（毎日新聞社、二〇〇八年）

- 『歌謡曲から「昭和」を読む』（NHK出版新書、二〇一一年）
- 『生きる力——心でがんに克つ』（講談社、二〇一二年、のち講談社文庫）
- 『天皇と日本国憲法——反戦と抵抗のための文化論』（毎日新聞社、二〇一四年、のち河出文庫）
- 『絵本詩集 金色の翼』（響文社、二〇一四年）
- 『平和の申し子たちへ——泣きながら抵抗を始めよう』（毎日新聞社、二〇一四年）
- 『生きるということ』（毎日新聞出版、二〇一五年）
- 『夜の歌』（毎日新聞出版、二〇一六年、のち講談社文庫）
- 『闘う力——再発がんに克つ』（講談社、二〇一六年）
- 『がんに生きる』（小学館、二〇一八年）
- 『わが人生に悔いなし——時代の証言者として』（河出書房新社、二〇一九年）
- 『作詩の技法』（河出書房新社、二〇二〇年／『なかにし礼の作詞作法——遊びをせんとや生まれけむ』復刻本）

添田馨（そえだ・かおる）

1955年宮城県仙台市生まれ。慶應義塾大学文学部独文科卒業。詩人・批評家。詩集に『語族』（第七回小野十三郎賞）『民族』（ともに思潮社）、『非＝戦（非族）』（響文社）、評論集に『戦後ロマンティズムの終焉——六〇年詩の検証』『吉本隆明——現代思想の光貌』（ともに林道舎）、『吉本隆明——論争のクロニクル』『ゴースト・ポエティカ——添田馨幽霊詩論集』（ともに響文社）、『クリティカル・ライン——詩論・批評・超＝批評』（第二十一回小野十三郎賞、思潮社）、『天皇陛下（8・8ビデオメッセージ）の真実』（不知火書房）などがある。

## 異邦人の歌

---

2021年7月20日 初版第1刷印刷

2021年7月30日 初版第1刷発行

著 者 添 田 馨

発行者 森下紀夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <https://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

編集／小川哲生

装幀／高林昭太

印刷・製本／中央精版印刷 組版／ロン企画

ISBN978-4-8460-2060-6 ©2021 Soeda Kaoru, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。